



# の時代

秦 恒平

筑摩書房



**秦 恒平** (はた・こうへい)

1935年京都市に生まれる。1958年同志社大学文学部文化学科を卒業。  
1959年上京、医学書院に勤務。1969年『清経入水』で第五回太宰治賞  
を受賞。1974年退職し、以後、作家として旺盛な執筆活動を展開、今  
日に至る。

著書に『慈子』『みごもりの湖』『冬祭り』『からだ言葉の本』など多  
数がある。

北の時代

◎ 秦 恒平  
一九八四

一九八四年六月三十日 第一刷発行

著 者 秦 恒 平

発行者 布川角左衛門

印刷 多田印刷

製本 積信堂

発行所 筑摩書房

東京 神田小川町二ノ八  
振替 東京六一四一二三  
電話 東京 三九一七五(営業)  
三九一七二(編集)

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に  
御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

|    |                              |    |
|----|------------------------------|----|
| 序章 | 〈北〉の時代                       | 六  |
| 二章 | 曙光、天明初年                      | 元  |
| 三章 | 徳内、蝦夷地へ                      | 八  |
| 四章 | 襟裳岬で                         | 三三 |
| 五章 | アイヌモシリ                       | 一五 |
| 六章 | 尾岱沼 <small>オダイトウ</small> で   | 二三 |
| 七章 | 徳内、択捉島 <small>エトロフ</small> へ | 二六 |
| 八章 | 天明六年、暗転                      | 三六 |
| 終章 | 〈北〉の時代、今なお……                 | 四〇 |

装幀および挿画  
原田維夫

# 北の時代

原題「最上徳内」『世界』岩波書店 一九八二年十月号～一九八四年二月号連載



最上徳内像

## 序章 〈北〉の時代

### 一

むかし、前漢かもう後漢のころだったか、いずれその時分に、趙なにがしという逸人があって、生前に自身の墓を築いた。墓の内には手ずから古聖賢四人の画像を賓位に画いて、自分の場処は余白のまま残し、そして折あれば世人を避け墓に潜んで、その時幽明の隔てなく、主客は自在に談笑して倦むことがなかったという。

趙は九十余歳、やがて己が死の遠からぬを悟ると、主人の座を負うた壁へ彩管を揮って、生けるがままの一体の自画像を画いた。そしてそれなりその墓は封じてしまった。文字にのみ伝えた史上最も夙い自画像の例として知られるが、幸いこの趙なにがしの自像墓は、何でも掘り返すのが好きな昨今の中国でも、見つけられていない。地下に二千年、気稟の清質最も尊ぶべく、和顔愛語の今も絶えないであろうことが嬉しいと、この話をはじめて聞いて、私は羨ましかった。

が、かく言う私にも幼来、一の、墓ではないが似たような小部屋がある。それもいわば折り畳み自由、いつ何処へなり脳裡に藏<sup>しま</sup>って持ち運びができる。このさい雅<sup>が</sup>な名前を如何様につけてもよい

が、端的に「部屋」と自分では呼んできた。古人多く死せるあり、理の当然ながら、この死んだはずの古人が招けば気安く「部屋」を訪れてくれる。様態は客の勝手だが、今日の風儀に、たいがい背かない。つまり気らくで、互いに堅い挨拶が要らない。君ぼくでも俺お前でもないけれど、面と対つて何を訊ねても、答えてもらえる。訊かれれば私も応える。趙某が寿藏のように、不得手に筆を用いてさながらに人がたを画く必要などない。それに気の多い私のこと、「お客」は聖人君子と限らない。好きな人を好きに招びたい。

但し識らぬ人を呼びようがない。「部屋」へ入り浸りでもおれない。むろん趙さんみたいに、「またですか」と奥さんに雲隠れの苦情は言われない。私の妻もなんとなく感づいているらしいが、肝腎の「部屋」へ出入りの戸口が妻の眼には見えないのだから、止めたて出来ない。

で、この数年に限っても「部屋」の客、なかなか数寡くはなかった。ひところ後白河の院に再々お見え願っていたし、前後して建礼門院にもお越しいただいた。お二人ともごく話し好きで、生前こそ畏れ多けれ、この「部屋」へ「お客」となれば至って自在なもの、遠慮がない。ご一緒にと言えばお揃いでも見える。

また、繁々と近ごろ顔を合わしている新井白石氏は、藍大島のすっきりした着流しに汚れめのない白足袋で現われ、とみに熱心にキリスト教を論じて行く。

氏は、宝永六年冬に、自ら望んでローマ宣教師シドッチを尋問している、あの折の感想や觀察を私が訊きたがり、白石氏もあれに就ては『西洋紀聞』その他に書かれたのと、また調子のちがった認識を今は持つておられるらしい。

シドッチの潜入意図について、万々疑念ははさみながら、だが彼を、決死の覚悟でローマからはるばる日本へ駆り立てた信心の根というものを、新井氏は心中に否定してしまえなかった。

言え、——際限がない。が、際限ないそのような訪客との歓談や質疑の中で、ことにこの数年、

しきりに望んで交際を重ねてきた、今一段ざつくばらん人物がある。昔ふうと言うと身丈「五尺二寸」「イロ白く鼻高く中セイ。」わけは——いろいろある。出逢いも、あった。出逢いから話すが、順というものだろう。

同姓の誼みで、かねがね私は歴史上の人物から、秦氏を名のった者ばかりを小事典ふうに書留めてきた。ためにする気ではない。読書の余禄をそんなふうに蓄えているだけの話、これがけっこう楽しい。

で、いつ時分だったか、征夷大將軍の坂上田村麻呂と蝦夷について調べているうち、名古屋尾張藩の儒者で、『一宵話』という随筆本を書いている秦鼎、なる人物と識る仲になった。

号滄浪、字士鉉。ふつう「エゾ」と訓まれる二字を、「カイ」と読むのを興味深い持論にしていた人で、それはさて措くとも、この秦さん、生涯名古屋に在りながら広く諸国に名を知られていたと言うのも、海道を往來の騷客が名古屋に立ち寄るつど、よほど親切に世話をする。それを徳とする中には、京都の、当時名高い頼山陽より秦鼎の文名は高いなどと過褒の辞を呈する者もいたくらい評判が良かった。顔も広かった。交友録をちょっと調べるだけで、当時知名の人物に幾らも出逢う。とりわけ「蝦夷」に絡んで見ていくと、北夷先生本多利明とか、千島探検の近藤重蔵のような名前も出てくる。間宮林蔵とも無縁ではなかったらしい。

さらに儲けものの同姓で、秦櫛丸という、咄嗟には読めない名前の人物とも、秦鼎の引合わせで識ることができた。「あわきまろ」と訓むが、「青木丸」とも書かれている。森銃三先生のご本などでみると村上島之允とも名乗っており、人間はなれのした健脚と、おそらく測地測量や図画の技倆とを、はやく楽翁松平定信に認められて天明八年郷里の伊勢から出府。以後、確かなところ寛政十年（一七九八）には、幕府による蝦夷地巡察隊に加えられて、四月、近藤重蔵にしたがい初めて奥蝦夷国オホシマ後島に渡った。

島之允は、北地での測量や製地図、著述などのりっぱな仕事もしている。間宮林蔵は、ふつう伊能忠敬の弟子と私など覚えていたが、それ以前、この村上島之允こと秦櫛丸のこも小者につき、蝦夷地体験を見習っていたらしい。常陸生まれ、弱冠二十歳のその林蔵が初めて津軽海峡を渡ったのは、寛政十一年のこと。〈北〉の時代——、公儀による蝦夷地見分は天明四年（一七八四）の発起このかた、すでに十五年もの春秋を重ねていた。

林蔵は後に、旧師の遺著『蝦夷図説』を丁寧に増補しているが、通称島之允には他にも著述多く、『蝦夷開島郡吏撰秦櫛丸』と自署のある『蝦夷島奇観』ほか貴重な北地資料を何点も遺してくれた。当時、松前藩士らがまともに人あしらいもしなかったというアイヌに対し、櫛丸は温かな気持を寄せていたらしく、その心がけだからまた抜群の働きも出来たのだろう、或る本に、「寛政中ヨリ松前へ御手入レラレ、色々ノ人物御撰ミ罷リ下リケルガ、最上徳内、村上島之允（櫛丸）、間宮林蔵、此三人ハ中ニモ格別ノ人ト見エタリ」と、評判してあるのも読んだ。この時——最上徳内という名前を、私は、恥ずかしい話だが覚えなかった。

「日本に稀なる大剛者の間宮——」と伊能忠敬は歎賞したそうだが、その林蔵さえはじめ蝦夷の、ことに食生活には馴染めなくて健康を損じ、危いめに一度ならず遭っている。「日に六、七十里」を行つたそんな島之允こと秦櫛丸も、寛政十年初度の国後渡島では脆くも病いに負け、じつは択捉渡海を恐れた仮病かと疑われてもいるが、上司近藤重蔵と行を共にせず、先輩らを煩わして薬餌の世話になっていた。事実、生の魚や昆布を常食し、時に茶漬代りに鯨の油をぶっかけて平然と粗飯をかきこむくらいアイヌの暮しになじまねば、ことに奥蝦夷（千島、樺太）ではなかなか生きていけないのだったが、先に挙げた三人で一等早く蝦夷地探検に大功を樹て、だれよりも闊達にアイヌや赤人（ロシア人）と暮して終始ビクともしなかったのは、最上徳内ひとりだった。「浪士」島之允を神経性の不眠とでも診察したか、適当に「甘草瀉心湯六七帖」も与え、介抱してやった先輩という

のも、この人——幕吏として津輕海峡を渡ることその時すでに六度、多年の功勞により市谷甲良屋敷（牛込柳町）裏に七十八坪の宅地を賜っていた、普請役の最上徳内だった。

だが、私はまだそんな何一つとして知らぬまま、「徳内」などと歌舞伎芝居のまるで奴さんみたいな名前を、なにやら可笑しく記憶しただけだった。

むろんのこと、徳内がさようにいつ医術を、誰から受けたかも知る由なかった。

ところがその後、さほど深い関心からではなく平田篤胤の『古史微開題記』など一、二を手に入れた、序でに、彼の年譜を調べているうち、この著名の国学者に、『傷寒論考証』という医学の著書があるのを知った。『傷寒論』とは後漢に遡るかという古典で、実証を重んじ、急性疾患に対し診察と処方の方を徹しく説いている。これを研究した医者も著述もむろん篤胤以前に幾らもあつて、最上徳内また『傷寒論註釈』と題し大部の著作を残していた。そればかりか、文政八年（一八二五）六月七日から同十三年十月十四日まで、足かけ六年間に、七十歳すぎた徳内が、ようやく五十代の平田篤胤をじつに頻々と、数字を挙げれば四十四、五回も訪問していたことが分かった。

へえエと声が出た。

今でこそ私は知っている。徳内には、秦蘊丸どころでない数多い著述がある。もとより『蝦夷草紙（正・続）』などの探検記や、蝦夷語辞典・地図の類が図抜けているが、算学、暦学、度量衡さらには『論語彙訓』二十三巻といった儒学の大著もある。その他実学の書も数々あるのに、平田篤胤の国学をとくに反映したような本は見えない。

それなら医術を篤胤に学んだかというところ、それも当らない。『傷寒論』なら徳内は自信満々、望まれれば、はやくから人に講釈して聞かすことも出来た。それと言うのも彼は三十歳まえに、官医山田図南の家に僕として仕えながら夙に医を心がけており、図南といえは『傷寒論集成』の著で朝野に大家の名をえていた人だ。

妙なななしだ——。ともかくの、それが感想だった。私はまだ「最上徳内」を、一面の、おもしろいジグソー・パズルとさえも認識できていなかった。

ところが、おいおいに徳内の方でこっちへ、私の方へ、寄ってくる。

あれは、江戸時代の応挙や大雅ら主だった画家たち十数人に就て、要するに「勉強法」のようなことを、半ば頼まれ仕事で調べていた時だ。たまたま谷文晁の手記を繰っていて、また、最上徳内の名に行き逢った。寛政九年と思われる某日、支那製であるらしい珍奇な織物の掛幅を、徳内がわざわざ持参して文晁のために見せているのだった。『過眼録』という手記は、およそ矚目のかぎり和漢の書画類を片端から観て、時に短評を加えているたいへん筆まめな記録だが、「探検家」徳内からの提供はどうやらその日その一点の一度だけ。呆気ないといえはそれまでだが、意外な交際を垣間みた面白さはあった。

また、物好きに或る随筆本の頁を古書店の土間でくるくるはぐっているうち、最上徳内が熱海の温泉に漬かりながら湯質を嘗め試みて、きつと良い塩がとれると土地の者に産業として勧めた、が、便宜も見込みもなくそのまま済んだ、といった話を見つけたこともある。他愛ない話だけれど、「さる巧思の人なれば」と、さりげなく本の筆者が徳内のことを評価する口ぶりなのが、妙に嬉しかったのを忘れない。

先の、画家文晁との場合が適例かどうか別にしても、徳内ほどの探検家になると、珍談異聞ばかりでなく、およそ奇観に類する物珍らかな蒐集品に対しても、博物学的に同時代人の興味や関心が集ったものらしい。

「松平陸奥守家来」で大槻玄沢といえはもう『蘭学階梯』を著わしていた聞こえた蘭医だが、この人が師と仰いだ杉田玄白や前野良沢らと伴れて、寛政六年（一七九四）五月、史上に島之允や林蔵のまだ影も見えぬ時分に、恒例参府の長崎オランダ商館長いわゆるカピタンの一行を江戸本石町の宿

舎、長崎屋源右衛門方に訪れて学術上の種々の質疑を試みた。その際に、御普請役の最上徳内が蝦夷地よりもたらしたという、今は某侯珍藏の産物を取りどり拝借して、オランダ人に鑑識を請うたと、耳寄りの記録を残してくれている。その珍物にはトナカイの「皮角」も混じっていて、紅毛人はこれはよく見分けたが、その他「皆多くは見及ばざるもの」で嘆声ばかりが洩れたとか。もっとも徳内自身は同席していなかった。

ところが右の寛政六年より三十二年後の、文政九年（一八二六）三月には、七十二翁の最上徳内自身が右の長崎屋へ赴いて、この年のカピタン率いる一行のうち、とくにドイツ人医師のフランツ・フォン・シーボルトと意気投合し、彼が江戸滞在中一ヶ月余の短時日で、大袈裟に言えば世界史に残る価値ある業績を日々に分担し合っていたのだから、私は驚いた。シーボルトの名著『日本』が収める、言いようもなく興味深い我が最上徳内のポートレートは、兩人がこの出逢いの折に画されていたのだった。

絵は、日本人の川原慶賀が画いて、オランダ人二人がいささか加筆したものという。画面の右下に、微笑ましいくらい拙に、「最上徳内」と自筆で署名がしてある。

慶賀は通称登与助。シーボルトが長崎へ来て育てた絵師で、洋画の写生法に秀で、シーボルトのために多くの風景や動植物画を画いて研究を助けているが、いつ生れいつ死んだかも分かっていない。慶賀は、わざと効果的にしたに違いない、徳内の半身像を格別顔を大きく克明に写して、威儀を正した紋服の肩から胸、両腕またひつつめた髭などは、ちんまりと温和しく画いた。

やや左を向いて、額広く、眉秀で、眼はしっかり睨にらいて鼻筋直く高い。うすい唇を一字に絞り、耳は鼻に劣らず大きい。一見魁偉の面ざしで、はなはだ剛情にも、律義にも見える。頬から顎へ贅肉のそげているのも意志的で、七十二翁どころか、四十半ばの精彩が貌かおにみなぎり見える。

徳内のことなど、そういつも念頭にはまだなかったのだ。が、或る日シーボルトの『江戸参府紀

行』を、東洋文庫の斎藤信氏の訳でたいして身も入れず読み進みながら、ハタとこんな最上徳内に行き当った。その気もなくジグソー・パズルの大事な部分を、私は、嵌め当てたのだ。

## 二

オランダ商館員の江戸参府は、かの国と我が国の、いや西洋と日本とのこもごも疏通の好機だった。ましてシーボルトのように、公然、スパイに近いほどの義務と執心とを傾けて学術の情報を蒐めていた人物には、文政九年のカピタン随行が、江戸参りの道中が、何ごとでありえたか彼の当時の日録があまさず語ってくれるが、とりわけ最上徳内との対面を、シーボルトは、故国の言い慣わしどおりに「特別に白い石で」記入したい、すこぶる幸せな事件として書き留めた。

一八二六年四月十六日（文政九年太陰暦の三月十日）の日記にこうある。

「本当にこの一六日は特別に白い石でもって記入する日なのである。最上徳内という名の日本人が、二日間にわたってわれわれの仲間を訪れた時に、彼は数学とそれに関係ある他の学問に精通していることを示した。支那、日本およびヨーロッパの数学の種々な問題を詳しく論じた後で、彼は絶対に秘密を厳守するという約束で、蝦夷の海と樺太島の略図が描いてある二枚の画布をわれわれに貸してくれた。しばらくの間利用できるようにというのである。実に貴重な宝ではあるまいか。」

シーボルトは、不用意に他人に読まれまいため、右の箇所に限ってわざとラテン語で書いた。徳内からの聞書をこのあとへ何倍もこまごまと記入しているのだが、それは徳内の北方体験談をシーボルトなりに判断し取捨したもの、書き馴れた母国語で書いていた。

ここに来て、私は、ただ史上散策の一人の行きずりではなく、最上徳内に就てもっと精しく知り

たい、知らねばおれない、これはたしかに、村上島之允や間宮林蔵をよほど上越す大事な人物らしいと考えた。他日自分の「部屋」に招じ入りたい、優に後白河院や新井白石級の逸材らしい、と、いささか重ッ苦しいくらい興奮気味に思い当った。と言うのも、文政十一年、つまり二年後の九月、果然国禁の日本地図を国外に持ち出す罪に問われていわゆるシーボルト事件が起き、彼は翌年日本国御構い、入国禁止を言い渡された。シーボルトとの間に貴重な地図その他を交換していた御書物奉行の高橋作左衛門景保が罪に問われ無残に獄死するなど、累は広く及んでこの後蘭学、洋学の進歩は大きく永く足踏みしてしまう大凡は、私も聞き知っていたからだ。

幸いシーボルト事件に徳内が連座した様子は見えない。

が、彼の貸した自製蝦夷地図などは与えたというのがやはり実状らしく、シーボルトはこの「老友」の立場を慮って、二十五年間は出版しないと約束していた。そして誓約は守られ、樺太島その他徳内原図は正確に文政九年から二十五年めの一八五一（嘉永四）年に、シーボルト編『日本陸図および海図帳』に収まり、出版された。

徳内の地図の原本は北海道、南千島、樺太島そしてマンコー（アムール河下流）河口を都合五枚に画いて、約三〇万分の一の準尺に作図したものだたと、シーボルトの『日本交通貿易史』は語っているし、これをもとに「最上徳内の原図によるカラフト島およびアムール河口の図」と題して、約二六万分の一に補訂されたみごとな大地図三枚が、今も、ベルリンの日本学会に収蔵されているという。

私は、躊躇なくいつも頼むW大学図書館に勤務の友人を煩わして、架蔵の“Atlas von Land und Seekarten von Japanischen Reiche, Dai Nippon, 1851”シーボルト編『日本陸図および海図帳』を観せてもらいに出かけた。

徳内の樺太図は或る学者の言うように「大陸から解放された厳然たる一島嶼として描かれて」い